

オーストラリアの開拓と土地計画

金 田 章 裕

1. はじめに
2. 方格プラン導入の背景
3. ニュー・サウス・ウェルズ植民地の方格プラン
4. 方格プランをめぐるさまざまな対応
5. 南オーストラリア植民地の方格プラン
6. 市街地の方格プラン
7. おわりに

1. は じ め に

小稿の目的は、19世紀中頃までのオーストラリアにおける、各植民地の開拓と土地計画の実施状況を概観し、各植民地が示すさまざまな特性の背景ないし要因について比較検討することにある。各植民地における詳細な状況についてはすでにいろいろな機会に公に¹⁾してきたし、前著『オーストラリア歴史地理』においてその一定の整理と位置付けを試みた¹⁾。小稿は、「オーストラリアの歴史と将来」と題した、第3回オーストラリア研究シンポジウム（昭和63年6月18日（第1日目）、大阪YMCAホール）において、標題のテーマの下で行った報告の内容を中心に成文化したものであり、論旨のかかなりの部分は前著に詳しく述べたところである。従って以下においては、同書においてすでに言及した内容・事実について、煩雑な注記を一切省略する²⁾。論拠となる史料・出典等については、同書を参照していただくことにしたい。

2. 方格プラン導入の背景

初期のニュー・サウス・ウェルズ植民地では、初代のフィリップ総督以来、6代目のブリスベン総督に至るまで、歴代総督は「便利なる規模と広がり¹⁾のタウンシップ」を設定すべく訓令されていた。自由移民や解放流刑者など、さまざまな資格の入植者に対し、それぞれ定められた面積の土地を下付することも定められていた。解放流刑者の男は30エーカー、

1) 金田章裕『オーストラリア歴史地理—都市と農地の方格プラン—』1985年、地人書房

2) 前著において言及することのなかった各種統計についても、Australian Bureau of Statistics (ABS) の公式統計によるものは注記を省略する。

妻は 20 エーカー、子供 1 人当り 10 エーカー、下士官は 100 エーカー、自由移民 50 エーカーといった単位が本来の規定面積であった。

このような訓令が必ずしもこのままで厳密に適用されたわけではない。しかし、18 世紀末までは、シドニー周辺の土地条件の良好な沖積層の部分に、パッチ状に小区画の入植地が散在していた。1788 年の最初の入植者数はわずか 1,024 人に過ぎなかったが、15 年後の 1803 年には人口 7,134 人、小麦 7,110 エーカー、トウモロコシ 4,338 エーカー、大麦 524 エーカー、牛 2,450 頭、羊 11,275 頭と増加した。翌年には、シドニーを要として西に広がる、半径約 24 マイルの扇形のカンバーランド平原において、土地条件の良い部分のほとんどが入植済となり、次第に表土の薄い頁岩・砂岩地帯にも開拓が及んでいった。

これに伴って、入植規模にも次第に大きなものが出現し、その傾向は、各種統制の廃止や、富裕な入植者への大規模な下付地などといった政策転換をしたキング総督の時代（1800～1806）以来、幅広く進行することとなった。土地区画は、形状・方位・規模のいずれの点からも不規則なものが分布することとなり、マックアリー総督の時代（1809～1821）には入植者の増大とともに、この傾向は一層推し進められることとなった。1821 年には植民地人口が 38,778 人に達し、カンバーランド平原のみでも 27,931 人に及んでいた。

一方、フィリップ総督がシドニー付近をカンバーランド郡と命名したものの、訓令にあるタウンシップは全く設定されなかった。ただ、1799 年頃までには、入植地群を地区と呼び始めるようになり、1810 年までには、さまざまな形状ではあるが、各地区の一定の範囲が確定されるようになった。地区数は次第に増加したが、1821 年には、測量長官オクスレイによって、カンバーランド郡の境域が調整・確定され、31 の地区が公示された。

類似のプロセスはバン・ディーメンズ・ランド（タスマニア）においても進行し、やはり小規模で不規則な区画が、同島南端のホバートと北端のローンセストンの間の川沿いに選定されていった。1821 年までには同島南半のバックinghamシャーに 23 の地区が設定され、1824 年までには北半のコーンウォールにも及んだ。

さて、このように開拓が進展し、人口が増加したニュー・サウス・ウェルズ植民地では、同時にさまざまな混乱や矛盾も顕在化し、本国政府も基本政策の再検討を迫られるに至った。その前提としての調査に、1819 年から 21 年にわたって派遣されたのがビッグ調査官であった。1812 年以来測量長官として、測量・土地区画の設定をはじめとする土地政策の実施責任者であったオクスレイは、それまでの土地政策・測量システム全般の限界を痛感し、その抜本的な改革をビッグに提言した。特に土地区画と測量システムについては、入植者の増加と開拓の進行に伴って、従来のような方法が完全に行き詰まっていることを詳しく説明した。すなわち、総督から下付地の認可を得た入植希望者が、自分で入植地を探して測量長官に申

3) アボリジニーと通称される原住民人口を含んでいない。当時の統計に依拠し、小稿では以下においても同様である。

請し、その上で測量官が派遣されてその区画が測量・設定される方法に代わり、次の3点を骨子とする新しい方法の採用を強く主張した。

- ① 入植地の下付以前に測量を実施し、前もって地図を作成しておくこと。
- ② 正方形の土地区画を設定すること。
- ③ 36平方マイル以下の地区を設定すること。

すなわち、一定程度の入植・開拓が進行し、土地政策実施および土地区画設定業務の複雑化・量的増大が進み、このような規則的な方格状土地区画の必要性が痛感されるに至ったことになる。ビッグも基本的にこれを認め、その報告書には上書の①と③を盛り込んだ。報告書の中では、各区画に番号が付されていること、それでもって各場所を掲示できること、を前提として記述していた。方格プラン導入への胎動は次第に大きくなったのである。

3. ニュー・サウス・ウェルズ植民地の方格プラン

マックアリー総督が更迭され、新総督ブリスベーンが就任したのは1821年12月1日であった。翌年2月18日、ブリスベーン総督は測量長官オクスレイに対し、東西・南北方向に区画された6マイル四方の正方形のタウンシップを設定し、その内部を1マイル四方のセクションに細分して、各セクションには北西隅に始まる1から36の番号を付すよう指示した。このような方格プランの設定の指令は、恐らくオクスレイの前述のような認識をも反映したものであろうが、少なくともビッグのロンドンへの報告とは別のものであった。

オクスレイは、測量官ダンガーをシドニーの北約130kmのハンター川河谷に派遣し、1823年までに1マイル方格のセクションと23のタウンシップを設定させた。同様にシドニーから西の内陸へ約140kmのバサースト付近においても、1824年までに1マイル方格のセクションと14のタウンシップが設定され、相前後してシドニー南方のショウルヘブン沿岸、その西の内陸のアーガイル郡一帯でも測量・区画が進められた。これらはいずれも、入植者に火急に土地を下付する必要にせまられて実施されたものであった。各測量ないし区画線の基準点がそれぞれの地域で個別に設定され、またその経緯度の測定が行なわれないうままに、それぞれの場所の磁北を方格の南北線としたものであった。セクションの区画線による6マイル四方を原則としたタウンシップが設定されたが、これもまた厳密なものではなく、河川が存在する場合にはそれがタウンシップおよびセクションの境界線として優先された。つまり、当時すでにアメリカ合衆国で確立していたタウンシップ・システムと同様の規格の方格プランであったが、経緯度の測定を欠き、また自然境界を使用することの多い不完全なものであった。

一方、オクスレイの提案を受け入れたビッグ調査官の報告書は、帰国後1822年から翌年にかけて、3次に分けて刊行された。ロンドンでは土地計画の基本政策を変更し、植民地担当

国務大臣バサーストが新指令を出したのは1825年1月1日付であった。この新しい決定がブリスベーン総督の下に届いたのは同年6月30日のことであり、その内容はすでに実施していた方格プランとは異なるものであった。すなわち、約40マイル四方の郡、約100平方マイルのハンドレッド、約25平方マイルのパリッシュ、1マイル方格(640エーカー)のセクションの設定を指示したものであった。ただし、これらの区分に際しては自然条件を重視すべきとする、やや融通性のある規定であった。

この方針は、ブリスベーンの後任のダーリング総督に対する、同年7月付の勅令によって一層明確に指示された。測量長官オクスレイと土地委員会は、すでに実施してきた旧来の土地計画との継続性を保つことに腐心したが、最大の相違点であるタウンシップからパリッシュへの転換については全く異をとらえなかった。

1825年には、早くもハンター川流域で、6マイル四方を原則としたタウンシップから、5マイル四方を原則としたパリッシュへの編成替えが行なわれた。この際に出現した42のパリッシュは、ほぼそのまま定着して後世に至った。ただしこの間、1828年に刊行された有名なダンガー図には55のパリッシュが描かれているが、旧来のタウンシップの規準で模式的に表現した区画をパリッシュと表現したものであり、ダンガーがやや特殊な状況の下で作成した、いわば理想的な模式図であった。

バサースト付近でもパリッシュは設定されたが、この場合には旧来のタウンシップの区画をそのままパリッシュに読み替え、新設分についてだけ新規定を適用したものであった。このように、必ずしも一定の規準あるいは方法ではなく、新規定をややルースに適用したものではあったが、ニュー・サウス・ウェルズ植民地の各地において、パリッシュと1マイル方格のセクションの設定が進行した。

一方、ハンター川河口付近のグロスター郡で、1843年ごろまでに4つのハンドレッドが設定され、カンバーランド郡では、1835年までに郡域が13のハンドレッドに区分された。カンバーランド郡のハンドレッドは3～9のパリッシュで編成されており、合計57のパリッシュは方格プラン導入以前における前述の地区を実質的に踏襲した単位とみられ、いずれも1マイル方格のセクションや5マイル四方のパリッシュといった規則的な方格プランとは無関係のものであった。しかも以上の例のほかには、ハンドレッドは全く設定されなかった。

郡については、上述の2郡を含む19郡が、1829年までに境域を確定して公示され、入植対象地の範囲とされた。

このように、ハンドレッドは例外的にしか設定されなかったが、パリッシュと郡は広範に設定が進んだ。しかし、このいずれもが、当初の期待とは異なって、実質的な地域単位としては未成熟のままであった。例えば1840年に設定された30の警察管区は郡の境域と全く無関係に設定され、1843年に設定された28の行政上の区会の範囲は、むしろこの警察管区を

基礎として設定された。パリッシュもまた、英国のような教区および行政単位として機能するようにはならず、1835年にはカンバーランド郡で道路建設・補修の単位となったものの、全体としてはほぼ地籍図の単位として以上の意義を有するには至らなかった。

ところで、1811年7月以来、測量長官として転換期の土地計画・測量の責任者であったオクスレイは、新指令遂行途上の1828年5月に没し、1827年から次官の任にあったミッチェルがその後任となった。ミッチェルは一般的な地形測量を重視し、次官就任直後から19郡の三角測量を開始して詳細な地形図を作製しており、前述の1829年における19郡の境域の確定と公示もその成果であった。

しかし、ミッチェルはオクスレイが推進してきた方格プランの設定には極めて消極的・批判的であり、1マイル方格のセクションによる土地区画よりも、個々の地点における地形条件に対応した土地区画の方が有効であると考えていた。従って、総督府に対してその見解を表明する一方、実際上も配下の測量官達に対し、しばしば方格のセクションを遵守しない土地区画設定の指示を出していた。例えば、1831年の新しい土地規定は、土地の競売システムと1エーカー当り5シリングという最低競売価格を設定したもので、若干の改訂を経つつも19世紀中頃までの基本となったものであった。ところがこの規定は、640エーカーすなわち1マイル方格の土地区画を前提としたものであったため、ミッチェルはこれに対しても総督府に否定的な見解を書き送った。そのため、植民地政府の執行委員会はこの規定の再検討を行った。しかし、測量庁次官ペリーを招喚してその見解を質した上で、1832年1月18日に改めて前年の規定の持続を決定した。

ところが、このようなミッチェルの態度のみならず、ニュー・サウス・ウェルズの方格プランは様々な問題を有していた。前述のように1マイル方格のセクションそのものが、1822年の設定開始以来、便宜的・応急的に設定されたものであり、経緯度の測量も行なわれていない不完全なものであった。しかも、それぞれの土地における磁北をそのまま方格線の規準としていたために不正確なものとならざるを得ず、測量長官ミッチェルの批判的・消極的姿勢とそれを反映した測量官への指示が、方格プランを一層不徹底かつ不完全なものとした。一方、1831年の土地規定以来、30年代・40年代にはニュー・サウス・ウェルズの人口が急増し、1851年には182,424人に達した⁴⁾。それに伴って、土地の販売申し込み件数が極めて多くなり、植民地政府は測量・土地計画の再検討を余儀なくされるに至った。そこで1855年、立法委員会内に測量庁調査委員会が設置され、広範囲にわたって全面的な調査を実施した。その結果、1822年以来的土地計画の基本であった1マイル方格の統一的な方格プランは完全に放棄されることになった。

4) 後のニュー・サウス・ウェルズ州の範囲の人口。1851年に分離するビクトリア、1859年に分離するクィーンズランドの範囲を除外した数。以下においても単にニュー・サウス・ウェルズと表現する場合は、後のニュー・サウス・ウェルズ州の範囲を示すものとする。

4. 方格プランをめぐるさまざまな対応

広大なニュー・サウス・ウェルズ植民地の内、後のニュー・サウス・ウェルズ州となる範囲における方格プランは、1820年代から1850年代にかけて前述のような流れをたどった。ところが、1825年にバン・ディーメンズ・ランド植民地として分離したタスマニア島や、1851年に分離したビクトリアでは、いずれも同一の植民地政府の下にあった時期においても、これとはかなり異なった様相を呈していた。

1825年以後のバン・ディーメンズ・ランドや、1829年に成立した西オーストラリア植民地においても、基本的にはニュー・サウス・ウェルズと同一の勅令・指令の下にあったにもかかわらず、それぞれに異なった測量・土地計画の状況であった。

1) バン・ディーメンズ・ランド (タスマニア)

カンバーランド平原と同じように、小規模で不規則な形状の土地区画が設定され、やはり同じように地区が設定されたことは前述の通りであった。しかしバン・ディーメンズ・ランドでは、1822年にブリスベン総督が指示したタウンシップとセクションは全く実施されなかった。1825年のロンドンからの新指令は同年7月、バン・ディーメンズ・ランドのアーサー準総督によって早速伝達され、同年末に新植民地としての分離の勅令が届くと、新測量長官ダマレスクの下で新指令が実行に移された。その結果1829年までには、11の郡、31のハンドレッド、124のパリッシュ、48の町立て用地が設定され、1836年1月1日に公示された。

ところが、1マイル方格のセクションは全く設定されず、その理由として、1834年に当時の測量長官フランクランドは、けわしい地形条件と植生の厚い被覆を指摘している。すなわち、地形が複雑で深い森林に被われているタスマニアでは、方格プランの有利性が認められないとするものであった。バン・ディーメンズ・ランド植民地では、分離の年の人口が14,192人、1840年には45,999人であったから、人口規模からすればニュー・サウス・ウェルズと同様に規則的な土地区画が必要となる背景があった筈である。にもかかわらず1マイル方格のセクションが設定されなかったのであるから、上述のフランクランドの説明が最大の要因であったとみてよいであろう。

このようにして、1マイル方格のセクションを伴わずに設定された郡、ハンドレッド、パリッシュは、ニュー・サウス・ウェルズの場合と同様に社会的・政治的な領域としては十分に成熟せず、やがて全く使用されなくなった。例えば、1827年に設定された9つの警察管区が11の郡とは全く別の基準によっており、1849年に案が作成され、1860～63年に実施された16の地方区画は、むしろこの警察管区を基本としたものであった。

2) 西オーストラリア

1829年に成立した西オーストラリア植民地では、初代のスターリング準総督は、植民地担当国務大臣マレーから、ニュー・サウス・ウェルズ植民地のダーリング総督に宛てた勅令の写しを受けとっていた。前述のように、これは1825年の新指令をより明確に示したものであり、西オーストラリアでも、郡・ハンドレッド・パリッシュ・セクションという各レベルの区画が設定されるべく指示されていたことになる。事実ロンドンでは、1831年には西オーストラリア植民地への入植希望者に対して、このような区画の設定が進行中であると政府から知らせていた。スターリング準総督は一方で、当面における川沿い、海岸沿いの土地の平等な配分をも指示されていた。

スターリング準総督と測量長官ロウは、入植後間もなく、スワン川と支流のカニング川の川沿いに、短辺を河岸に接した長大な区画を設定した。1835年にその不都合の解消をめぐる請願書が入植者から出されたが、ロウは当初の段階における地図の未整備、測量官の不足等を根拠として、この長大な区画の設定をやむを得ない措置としている。このような区画をやむを得ない措置としながらも、当初のものほど狭長ではないものの、河岸に短辺を接した長方形の区画は、その後も設定され続けた。1839年には、土地区画を、長さが幅の3倍を超えない形で、すでに設定された土地区画の方向に設定するものと規定された。つまり、一旦設定された川沿いのさまざまな方向に、大小さまざまな大きさの方格区画が付加されていくこととなった。同年末には、ロンドンでも西オーストラリアにおける1マイル方格のセクションには固執しない方針が確認された。

このようにして、西オーストラリアでは1マイル方格のセクションは全く採用されずに終わったが、郡・ハンドレッド・パリッシュなどについての関心の方はその後も持続していた。1837年には一辺40～50マイル程度のほぼ方形の15の区画と区画名が記入された地図がロンドンへの報告書に添付され、1839年までには26区画に増加した。この26区画は1840年代にも、何度となく地図に描かれるが、正式に郡の区画として公示されたものではなかった。1852年になっても、測量長官ロウは郡の境界線とその内部の区画の境界線の設定を、測量庁の業務に列挙しているが、終にそれが実施されて公示に至ることはなかった。つまり、方格プランの実施は、西オーストラリアでは単なる目標ないしはロンドンへのリップ・サービスの域を出るものではなかったことになる。

西オーストラリアの西南部は、パース東方から南へのびるダーリング山脈を除けば、極めて平坦であり、バン・ディーメンズ・ランドにおけるような、測量に対する自然的制約は極めて少ないといえよう。にもかかわらず統一的な1マイル方格のセクションをはじめ、パリッシュ・ハンドレッド・郡が全く設定されなかったのは、第1にその必要性が低かったことによるものと思われる。1837年においても軍人を含む総入植人口が2,032でしかなく、1840年に2,311人、1850年に5,886人と、入植者と人口の増加が極めてゆっくりとしか進行

しなかったからである。50年代において漸く人口増加が進み、1860年には15,346人となったが、これでもバン・ディーメンズ・ランドの分離の時期よりわずかに多いだけであり、オクスレイが規則的な土地測量・区画の必要性を訴えた当時のカンバーランドの人口の約55%でしかないことになる。

もう一つの理由として考えられるのは、初代測量長官ロウが1829年から実に1872年に至るまでの長期間その任にあったことである。初代の準総督スターリングが、1832年に任を終えて一旦帰国した後、1834年から38年まで改めて総督として来任したことも加えてよいであろう。当初のスターリングとロウによる川沿いの長大な区画の設定が、若干の修正を加えられつつも、類似の方針として継続する大きな理由になったものであろう。ゆるやかな人口増加が、これの根本的な改変を必要としなかったものとして大過ないであろう。

3) ポート・フィリップ地区（ビクトリア）

ポート・フィリップ地区における測量と土地区画設定は、ニュー・サウス・ウェルズ植民地のバーク総督の下で1836年に開始され、翌年にはバーク総督が現地で測量官ホドルと共にメルボルンの基本計画を決定した。1838年には後任のギップス総督がポート・フィリップ地区をバーク郡と名付け、同地区の土地関係業務をニュー・サウス・ウェルズから分離した。すなわち一面から見れば、同じニュー・サウス・ウェルズ植民地内でありながら、実質的に測量長官ミッチェルの管轄外となったことになる。⁵⁾ 1840年には植民地担当国務大臣ラッセルからの新しい指令が届き、1マイル方格の土地区画の設定の継続を事実上認め、土地関係の行政をシドニーとは別にメルボルンにおいて実施することを正式に指示した。この指令は同時に、後世におけるビクトリアとクィーンズランドの分離構想をも明示していた。

このような経過をたどりつつ、恵まれた自然条件を背景にポート・フィリップ地区には急速に入植が進み、1836年にわずか224人に過ぎなかった人口が、1840年には早くも10,291人に達していた。同年の9月頃までに、バーク郡は分割されてバーク郡とグラント郡となり、計39のパリッシュが設定された。各パリッシュは1マイル方格のセクションを30程度含み、セクションの直線ないし河川を境界線としていた。両郡のパリッシュは1847年には69に増加する一方、1842年には西方にノーマンビー郡が設定されるなど、1846年までに計16郡となった。人口の増大は依然として急速であり、1846年に38,334人、ビクトリア植民地正式発足前年の1850年には76,162人に及んだ。

この間のポート・フィリップ地区の測量・区画設定は前述のホドルが中心となって推進し、

5) ミッチェルは1837年から1841年にかけて、ロンドンへ出かけるためにシドニーを離れていた。新しい地形測量の成果を報告・出版するのが主目的であった。

ビクトリア植民地発足後は初代の測量長官となった。⁶⁾ ポート・フィリップ地区の平坦地の部分において、ホドルを始めとする測量官達は比較的忠実に1マイル方格のセクションとパリッシュの設定を続けた。測量の方法や基準は全くニュー・サウス・ウェルズと同様であり、各地域における磁北をそのまま方格線とし、経緯度の測定も行なわれておらず、測量誤差も加わって、場所によってはさまざまな方位の方格プランのモザイクとなっている。

1858年に測量長官に就任したリーガーは、このような事態の解決策として、また最も安価な測量・区画法として、アメリカ合衆国のタウンシップ・システムが基本としたような、経緯線を使用する方法の採用を主張した。これによって、一辺が経緯度の10分の1、すなわち6分=約6マイルからなるパリッシュと、その内部の1マイル方格を原則とするセクションが設定された。パリッシュが1マイル方格とは厳密に対応しないために、各所に1マイル未満ないし1マイル以上の間隔の部分が生じるが、方格プランであるには違いない。1871年までには21郡が設定されて全植民地が郡に区分され、パリッシュの総数は2,004に達した。ただし、ハンドレッドは全く設定されなかった。

このようにして、ニュー・サウス・ウェルズと同一の政府の下にありながら、ポート・フィリップ地区では、はるかに広範に1マイル方格のセクションが設定された。ニュー・サウス・ウェルズでは1855年に全く断念せざるを得なかった1マイル方格の測量・区画システムが、ビクトリアでは連続したのみならず、1858年以後に別の形で展開したことも興味深い対照である。人口増大が急速であり、均一的な土地区画の必要性和有効性が高かったことや、地形条件などの地形的制約の少ない平原が多かったことも重要な要因であろう。しかし、それ以上に好対照を示すのは、ミッチェルという方格プランに消極的ないし批判的な測量長官の存在と、ホドルなど方格プランの設定に熱心な測量官の存在とである。同一の植民地政府の下にありながら、ほぼ最初の段階からポート・フィリップ地区が別の土地政策の実施単位となっていたことがその背景にあったことも先に述べたところである。

5. 南オーストラリア植民地の方格プラン

ポート・フィリップ地区=ビクトリアにおいて方格プランが展開した時期には、相前後して、南オーストラリアでは全く別の方格プランの設定が進んでいた。しかも、南オーストラリア植民地の成立の由来そのものが、オーストラリアの他の植民地とは全く異なっていた。

6) ホドルは1837年3月にポート・フィリップ地区に来任し、しばしば健康を害し、1839年の数カ月をはじめ、時折休養することがあったが、それを除けば、ほぼ一貫して初期ビクトリアの測量と土地計画について中心的役割を果たした。1853年には、これも健康上の理由で測量長官を辞任した。(M. J. Tipping, Hoddle, Robert, in D. Pike ed., *Australian Dictionary of Biography*, Vol. 1, Melbourne, 1966. Isaac Selby, *Robert Hoddle's Survey, A Photographic Atlas of Early Victoria, 1837 to 1856*, Melbourne, 1928, p. 6)

しなかったからである。50年代において漸く人口増加が進み、1860年には15,346人となったが、それでもバン・ディーメンズ・ランドの分離の時期よりわずかに多いだけであり、オクスレイが規則的な土地測量・区画の必要性を訴えた当時のカンバーランドの人口の約55%でしかないことになる。

もう一つの理由として考えられるのは、初代測量長官ロウが1829年から実に1872年に至るまでの長期間その任にあったことである。初代の準総督スターリングが、1832年に任を終えて一旦帰国した後、1834年から38年まで改めて総督として来任したことも加えてよいであろう。当初のスターリングとロウによる川沿いの長大な区画の設定が、若干の修正を加えられつつも、類似の方針として継続する大きな理由になったものであろう。ゆるやかな人口増加が、これの根本的な改変を必要としなかったものとして大過ないであろう。

3) ポート・フィリップ地区（ビクトリア）

ポート・フィリップ地区における測量と土地区画設定は、ニュー・サウス・ウェルズ植民地のバーク総督の下で1836年に開始され、翌年にはバーク総督が現地で測量官ホドルと共にメルボルンの基本計画を決定した。1838年には後任のギップス総督がポート・フィリップ地区をバーク郡と名付け、同地区の土地関係業務をニュー・サウス・ウェルズから分離した。すなわち一面から見れば、同じニュー・サウス・ウェルズ植民地内でありながら、実質的に測量長官ミッチェル⁵⁾の管轄外となったことになる。1840年には植民地担当國務大臣ラッセルからの新しい指令が届き、1マイル方格の土地区画の設定の継続を事実上認め、土地関係の行政をシドニーとは別にメルボルンにおいて実施することを正式に指示した。この指令は同時に、後世におけるビクトリアとクィーンズランドの分離構想をも明示していた。

このような経過をたどりつつ、恵まれた自然条件を背景にポート・フィリップ地区には急速に入植が進み、1836年にわずか224人に過ぎなかった人口が、1840年には早くも10,291人に達していた。同年の9月頃までに、バーク郡は分割されてバーク郡とグラント郡となり、計39のパリッシュが設定された。各パリッシュは1マイル方格のセクションを30程度含み、セクションの直線ないし河川を境界線としていた。両郡のパリッシュは1847年には69に増加する一方、1842年には西方にノーマンビー郡が設定されるなど、1846年までに計16郡となった。人口の増大は依然として急速であり、1846年に38,334人、ビクトリア植民地正式発足前年の1850年には76,162人に及んだ。

この間のポート・フィリップ地区の測量・区画設定は前述のホドルが中心となって推進し、

5) ミッチェルは1837年から1841年にかけて、ロンドンへ出かけるためにシドニーを離れていた。新しい地形測量の成果を報告・出版するのが主目的であった。

ビクトリア植民地発足後は初代の測量長官となった。⁶⁾ ポート・フィリップ地区の平坦地の部分において、ホドルを始めとする測量官達は比較的忠実に1マイル方格のセクションとパリッシュの設定を続けた。測量の方法や基準は全くニュー・サウス・ウェルズと同様であり、各地域における磁北をそのまま方格線とし、経緯度の測定も行なわれておらず、測量誤差も加わって、場所によってはさまざまな方位の方格プランのモザイクとなっている。

1858年に測量長官に就任したリーガーは、このような事態の解決策として、また最も安価な測量・区画法として、アメリカ合衆国のタウンシップ・システムが基本としたような、経緯線を使用する方法の採用を主張した。これによって、一辺が経緯度の10分の1、すなわち6分=約6マイルからなるパリッシュと、その内部の1マイル方格を原則とするセクションが設定された。パリッシュが1マイル方格とは厳密に対応しないために、各所に1マイル未満ないし1マイル以上の間隔の部分が生じるが、方格プランであるには違いない。1871年までには21郡が設定されて全植民地が郡に区分され、パリッシュの総数は2,004に達した。ただし、ハンドレッドは全く設定されなかった。

このようにして、ニュー・サウス・ウェルズと同一の政府の下にありながら、ポート・フィリップ地区では、はるかに広範に1マイル方格のセクションが設定された。ニュー・サウス・ウェルズでは1855年に全く断念せざるを得なかった1マイル方格の測量・区画システムが、ビクトリアでは連続したのみならず、1858年以後に別の形で展開したことも興味深い対照である。人口増大が急速であり、均一的な土地区画の必要性和有効性が高かったことや、地形条件などの地形的制約の少ない平原が多かったことも重要な要因であろう。しかし、それ以上に好対照を示すのは、ミッチェルという方格プランに消極的ないし批判的な測量長官の存在と、ホドルなど方格プランの設定に熱心な測量官の存在とである。同一の植民地政府の下にありながら、ほぼ最初の段階からポート・フィリップ地区が別の土地政策の実施単位となっていたことがその背景にあったことも先に述べたところである。

5. 南オーストラリア植民地の方格プラン

ポート・フィリップ地区=ビクトリアにおいて方格プランが展開した時期には、相前後して、南オーストラリアでは全く別の方格プランの設定が進んでいた。しかも、南オーストラリア植民地の成立の由来そのものが、オーストラリアの他の植民地とは全く異なっていた。

6) ホドルは1837年3月にポート・フィリップ地区に來任し、しばしば健康を害し、1839年の数カ月をはじめ、時折休養することがあったが、それを除けば、ほぼ一貫して初期ビクトリアの測量と土地計画について中心的役割を果たした。1853年には、これも健康上の理由で測量長官を辞任した。(M. J. Tipping, Hoddle, Robert, in D. Pike ed., *Australian Dictionary of Biography*, Vol. 1, Melbourne, 1966. Isaac Selby, *Robert Hoddle's Survey, A Photographic Atlas of Early Victoria, 1837 to 1856*, Melbourne, 1928, p. 6)

その背景には、1822～3年のビッグ調査官の報告書等によって一連のオーストラリアにおける植民地政策の再検討が行われていたことがまず指摘できる。前述のような1825年の新しい土地計画の指令とその後の土地政策の変更、同年のバン・ディーマンズ・ランド植民地の分離、1829年の西オーストラリア植民地の設立といった動きがまず進行した。このような流れの中で、1829年には、ニューゲイトの獄中で書いたウェイクフィールドの新聞記事「シドニーからの手紙」が、ロンドンの耳目を集め、ちょうどこの頃、マレー川下流域の探検が行なわれた。肥沃な土地が発見されたという報がロンドンに伝わったのは1831年のことであり、これらが新植民地設立の動きへと結びついた。南オーストラリア植民地の新設が決定されたのは1834年のことであった。

新植民地設立法は、南オーストラリアに他のオーストラリア植民地とは異なった土地政策をもたらした。その最大のものはウェイクフィールドなどが主張した組織的植民政策であり、①入植者が自動的に自作農とならず、一定の農業労働者を確保するために土地を均一の比較的高価格で販売すること、②一方で、資力のない英国人移住希望者への旅費の補助をすること、③すでにニュー・サウス・ウェルズで進行しつつあった640エーカー（1マイル四方）の区画ではなく、80エーカーの土地区画を基本とすること、などが大きな特徴であった。この80エーカーの単位面積の由来は明らかではないが、恐らくは前述のような初期の植民地の土地下付に際しての基準における解放流刑者の夫婦と子供3人分の面積等が背景にあったものと推定される。これによって効果的な農業開発を行ない、一定程度以上の居住と耕地化の進んだ農業社会を建設する、というのがその目的であった。

新しい法律の下で土地の予約購入の募集がロンドンで行われた。当初の予定歳入額として35,000ポンドが見積られ、一方で土地価格の高低が議論されたので、1エーカー当り12シリングと1ポンドとの間を揺れ動いた。その結果、1836年7月までの地券購入者437人には81ポンドで園宅地1エーカーと農地134エーカーが、それ以降の分については同じ金額で園宅地1エーカーと農地80エーカーが販売された。最初に現地へ赴いた初代測量長官ライトは、1837年～38年にかけて、アデレードの都市計画の策定とその周辺部における80エーカーと134エーカーの区画の設定を行った。ライトは437人の入植者に134エーカーの土地をまず選定させ、残りを80エーカーに区画するという困難な指令に対応せねばならなかった。このため1マイル間隔の南北道を設定した上で、まず134エーカーの区画を設定し、選定の残余を80エーカーの区画に再編したため、調整の必要上26エーカーと54エーカーの区画も出現した。ところが間もなく、初代総督ハインドマーシュとの対立から、ライトは辞任し、ハインドマーシュも植民地行政の混乱の責を負って召還された。

1838年10月からは後任のゴラー総督の下で、ついで翌年9月からは新測量長官フロームの下で、測量・区画設定が進められ、80エーカーを単位とする方格プランが出現した。フロームによって実施されたのは、80エーカーの区画4つからなる正方形の四周を道路で

画し、その方位は幹線道路や地形に合わせるものであった。従って、方位は場所によってさまざまであった。しかも、方格状道路の間隔が約 0.7 マイルという端数からなることもあって、80 エーカーを基準とする基本区画にもしばしば数エーカーの大小があった。1842 年以後においては、英本国政府の政策上は、南オーストラリアも他のオーストラリア植民地と同一になったが、他の植民地には見られなかった 80 エーカーを単位とする方格プランは、そのまま設定され続けた。

1842 年には、それまでの A～F のアルファベットで呼ばれた便宜的な 6 つの地区に代わり、9 つの郡が設定・公示された。1846 年にはさらに 2 郡が加わった。その後も郡は増加して現在は 49 となっているが、郡が設定されているのは植民地ないし州の南部だけに限られている。

また、1846 年からは、ハンドレッドの設定も開始された。南オーストラリアにおけるハンドレッドは、ニュー・サウス・ウェルズにおけるそれと異なり、パリッシュをグルーピングしてできた上部単位としてではなく、ハンドレッド内に土地を取得して入植した人々の共同放牧地の範囲を画するものとして設定された。つまり、農牧業ひいては社会生活上、当初からかなり重要な意味のある単位として設定された。

1846 年に設定・公示されたのはハインドマーシュ郡とアデレード郡の計 19 のハンドレッドであり、次第にアデレードから離れた部分へと設定が進んだ。1850 年代までに設定されたハンドレッドには不規則な形態のものが多く、中には著しく狭長なものもあった。1860 年には特別委員会が設置されてハンドレッドの再検討が行われ、それ以後、90～130 平方マイルのほぼ方形の画一的なハンドレッドの設定が進んだ。ハンドレッドの数は現在 526 に達している。

南オーストラリアでは、このようにして郡、ハンドレッド、80 エーカーのセクションの設定が進んだ。しかし、パリッシュは全く設定されなかった。一方、開拓の進行にともなって、入植地はアデレード周辺やその背後のロフティ山地一帯における比較的降水量の多い部分から、北部や内降部の降水量の少ない部分へと拡大し、それに伴って基本区画の面積も次第に大きくなった。1850 年代には 160 エーカー程度の区画が多くなり、1860 年代～70 年代には、次第に 320～640 エーカーのものが一般的になった。方位も東西—南北方向の区画線によるものが一般的になったが、方格そのものは必ずしも厳密なものではなかった。

ハンドレッドは広範囲に設定され、それぞれが内部の入植者の共同放牧地の単位であり、その多くには後述するような中心集落も設定された。従って、これが実質的な社会的単位・行政単位として定着する可能性があったとみてよいが、結果的には必ずしもそのようには進行しなかった。現在の南オーストラリアの農牧地帯における行政単位は区会であり、その数が 92 であるから、ハンドレッドよりは相当広く、平均的には郡の半分程の面積ということになる。

6. 市街地の方格プラン

ニュー・サウス・ウェルズ植民地の初代総督フィリップは整然とした市街を有するシドニーの建設を構想していた。しかし、それを実現するゆとりのないままに、シドニーは狭い街路が不規則にのびた市街となった。マックアリー総督は1809年の就任以来、シドニーの道幅を50フィートに広げ、道路とまっすぐにするなど、整備・再編に意を注いだ。方格プランという点では極めて不十分に終わった。

一方、ニュー・サウス・ウェルズの歴代総督は、「便利なる規模と広がり」のタウンシップごとに町を設定すべき訓令を得ていた。しかし現実にはこれはほとんど実施されず、本格化するのは1829年以後のことであった。

1828年から中心集落の設定と維持に関する規定の検討が開始され、1829年5月に公示された⁷⁾、ダーリング総督の下で公示されたこの規定⁸⁾には、直交状の街路、幅100フィートのメインストリート、84フィートのこれと直交する街路、0.5エーカーの長方形の宅地などが含まれており、都市計画に典型的な方格プランが採用されたことになる⁹⁾。

この規定の策定とほぼ併行して、測量長官ミッチェルの下でハンター河谷にマイトランドが設定され、以後1830年代において、ハンター河谷の多くの中心集落が具体的に策定された。このような中心集落を設定する場合、地元の要請などをもとにしてまず場所が設定され、地形測量のあとシドニーの測量庁で計画が決定され、公示された¹⁰⁾。中心集落の立地点が選定される際には、水陸の交通条件、市街地としての地形条件などが重要視されたが、このような形で設定される官設の中心集落のほかに、自然発生的ないしは私設の町も成立した。

ハンター河谷では、最初に設定されたマイトランド自体がダーリング総督の規定を十分に遵守したものではなく、その後に建設された中心集落の都市計画もかなりの融通性をもっていた。ダーリング総督の規定に比較的によく準拠したものと、そうでないものもあり¹¹⁾、このようなパターンがニュー・サウス・ウェルズではかなり一般的であったとみられる。ミッチェル自身はマイトランド以後、都市計画にはほとんど関与しなくなった。

1843年には土地区画を市街地区画・郊外区画・地方区画の3者に分類し、市街地区画を0.5エーカーないし0.25エーカー、郊外区画を2～640エーカーのさまざまな区画として設

7) 金田章裕、ニュー・サウス・ウェルズ植民地における中心集落の計画とその実施—19世紀前半のハンター河谷を中心に—、『オーストラリア研究紀要』12, 1987

8) Government Order, *Sydney Gazette*, 30 May 1829

9) 金田、前掲7)

10) D. N. Jeans, *Official Town-Founding Procedures in New South Wales 1828–1842*, *Journal of the Royal Australian Historical Society*, Vol. 67, No. 3, 1981

11) 金田、前掲7)

定・販売することとした¹²⁾。地方区画は従来の農牧地と異ならないから、郊外区画が全く新しい設定である。

また、前述のように 1825 年にパリッシュの設定が開始されて、ブリスベーン総督の指示によるタウンシップが廃止されると、タウンシップの語は「町立て地」とでもいうほどの意味で、町やヴィレッジなどと大差のない意味で使用されるようになった。

先に述べたようにパーク総督とホドルによって、1837 年に設定されたメルボルンの場合、99 フィート幅のメインストリートによって区画され、全体が長方形の外形となっていた。宅地は 0.5 エーカーの長方形であり、20 区画が一辺 10 チェーン（660 フィート）のほぼ正方形のブロックとなって、四周が 99 フィートの街路で画されていた。各ブロックの中央を東西方向に、33 フィート幅の小街路が通っていたが、これを除けば、前述のダーリングの規定に比較的忠実な典型的方格プランであった。

1824 年に牢獄都市として出発したブリスベーンの場合も、1842 年に方格プランに再編された。幅約 80 フィートのインストリートと幅 66 フィートの主要街路が長さ 10 チェーン、幅 5 チェーンのブロックを画するものであった。

当時のニュー・サウス・ウェルズ植民地の各地には、このようにほぼダーリングの規定によった方格プランの都市の建設が進んだ。メルボルンが最も典型的な例であり、整然とした方格プランが多かったが、かなり融通性に富んでいたことは前述の如くである。特に街路の方向は、地形条件や先行して存在していた道路などに規制されて、さまざまな方位を示していた。

1829 年にスターリング準総督と測量長官ロウによって成立したパースの場合、幅 6 チェーン、長さ 150 チェーンの長方形のブロックを標準とする方格プランであったが、ブロックの長さも幅も厳密に一律に設定されたものではなかった。各ブロックは 1.5×6 チェーンを標準とする細長い宅地に区分され、方位もまた地形条件に合わせてさまざまであった。相前後して設定されたフリーマントルでは初めからいくつかの道路の方向を軸とした大小さまざまなブロックと宅地区画を有していたし、パースにおいて間もなく拡大された新市街区画も同様であった。このように、主軸が不明確で、かつ地形条件に合わせていくつかの方位からなるさまざまなブロックで構成された都市プランが、初期の西オーストラリアでは支配的であった。前述のように測量長官ロウの在任期間が足かけ 42 年もの長期に及んだことが、農牧地の土地計画の場合と同様に、パース型の都市プランの影響を大きくした可能性が高い。

農牧地にユニークな方格プランが施された南オーストラリアでは、都市プランもまた極めてユニークであった。立地・都市計画・都市名のいずれについても、総督の意向を考慮しないか、これを無視して計画されたアデレードは、初代測量長官ライトの個人的な作品であっ

12) Land Regulations, 1 March, 1843, *New South Wales Government Gazette*.

たと言っても過言ではないであろう。トレンス川の南岸の段丘面上に中心市街を設定し、周囲の段丘崖をパークランド（緑地）としたものである。中央に長方形の広場を設け、ここを中心として直交する2本のメインストリートによって全体を4象限に区分し、各象限ごとに再び中央に長方形の広場を設定したもので、1エーカーの正方形の宅地16からなる長方形のブロックを道路が画していた。極めて規則性の高い、典型的な方格プランであった。同時にトレンス川の北岸にも、このミニチュア版のような北アデレードを設定した。

南オーストラリアでは、アデレードの強い影響の下に、パークランドを伴った方格プランの都市が数多く計画され、不完全な形態のものも含めると、19世紀のうちにその数が186にも及んだ。このようなパークランドの構想が何によって成立したのかについてはさまざまな推測があるが、ニュー・サウス・ウェルズ植民地の都市の周辺に設定されることが多かったリザーブと共通の発想の上にあるものと考えたい。アデレードの場合は段丘崖への対応という形で計画的に都市計画にとり込まれたのであろう。南オーストラリアにおけるパークランド・タウンの展開は、一部ビクトリアにも影響が及んでいるし、前述の1843年の土地規定にみられる郊外区画の規定も、当時の類似の社会的条件を背景としたものである可能性が高い。

このようにオーストラリアでは、ニュー・サウス・ウェルズ植民地においてはダーリングの規定を基本とした都市が多く、典型的な例からすればメルボルン型とでも呼ぶことができ、同様に西オーストラリアではロウ型（パース型）、南オーストラリアではライト型（アデレード型）とでも表現し得る都市プランが展開した。

7. お わ り に

以上のような、オーストラリア各植民地における土地計画と開拓の状況を整理すると、次の表ようになる。6つの植民地が、それぞれ固有の条件のもとに、相互にかなり特色のあるプロセスをたどり、結果的にさまざまな土地計画が展開したことになる。オーストラリアの都市や農牧地は、現在でもなおこのような初期の土地計画の強い影響の下で成立している。各植民地ごとの状況は同表に整理をしたので再言しないが、それぞれの植民地における土地計画の性格を規定した要因について、以下要約的に比較検討しておきたい。

ニュー・サウス・ウェルズ植民地に対する本国政府の規定は、一定の基準を示しつつも土地計画の細部について定めてはいなかった。「タウンシップ」や町の設定を指示しつつも、その面積・形態等についての具体的な規定はなかった。初代総督フィリップはシドニーを計画的な整然とした市街とする構想を有していたが実現せず、入植地の分布も土地区画の形状もまた不規則なままに展開した。これに対して、やがて整然とした方格プランに転換しよう

とする動きが起った。市街地についていえばマックアリー総督（1809～1821）の時代に不規則に広がった市街の先駆的な改造が行われ、1829年にダーリング総督の下で策定された都市計画の規定として、規定の上では整然とした方格プランとなった。農牧地についていえば、人口の増大に伴って、不規則かつ選択的に入植地を選定し、測量・区画設定を行うことの限界を、測量長官オクスレイが訴えるのが1821年、ブリスベン総督の下でオクスレイが方格プランを実施し始めるのが、その翌年であった。ただし、この6マイル四方のタウンシップと1マイル方格のセクションは、本国政府の指令によって、1825年には前者が25平方マイルのパリッシュに変更され、さらに郡とハンドレッドの規定も加えられた。この経緯は、本国政府から遠く離れた植民地特有のものであろうし、それが混乱をもたらした典型的な例であろう。

いずれにしろ、1825年に規定された郡・ハンドレッド・パリッシュ・セクションは、ニュー・サウス・ウェルズのみならず、バン・ディーメンズ・ランド、西オーストラリア、後のビクトリアについても適用されるべきものであった。しかし、場所によってその実施の状況は様々であった。

ニュー・サウス・ウェルズでは、郡・パリッシュ・セクションの設定が行われ、ごく一部でハンドレッドも設定されたが、1マイル方格のセクションの設定はそれ程拡大せず、1855年に実施が断念された。特に測量長官ミッチェルが方格プランに反対ないし消極的であったことが大きな要因であり、彼は複雑な地形条件をその理由にあげた。オクスレイ以来の1マイル方格の設定が極めて不正確であったことも一つの理由であった。恐らくは類似の理由によって、都市計画の際におけるダーリング総督の規定の適用も厳密ではなかった。

バン・ディーメンズ・ランドでは、郡・ハンドレッド・パリッシュが一旦規定されたが、1マイル方格のセクションは全く設定されなかった。測量長官フランクランドはその理由を、けわしい地形と深い森林にあるとした。

ところがビクトリアでは、土地関係の業務がシドニーとは別に行なわれたこともあって、ニュー・サウス・ウェルズと大幅に異なった展開を示した。ハンドレッドは全く設定されなかったが、郡・パリッシュ・セクションはオーストラリアでは最も典型的に設定された。1マイル方格の不正確さという点ではここでも同様であったが、それが方格プランの実施継続のマイナス要因とはならず、1858年からは経緯線による方格プランの採用へと進んだプロセスは特に対照的であった。パーク、ギブズ等のニュー・サウス・ウェルズ総督とホル等の方格プランに積極的な測量官・測量長官の存在に注目しておかねばならない。従って、都市計画に関するダーリング総督の規定もまた、メルボルンに見られるように相対的によく遵守されている。

クィーズランドの場合、実質的にも、制度的にも分離が遅れるために、19世紀中頃までについてはニュー・サウス・ウェルズの土地計画の状況と大きな違いがない。

オーストラリア土地計

NSW		VDL (TAS)	QLD
1788. 1. 16	Sydney Cove 入植	解放流刑者 男子 30	エーカー
		妻 20	"
1789	「便利なる規模と広がりのTownship」	子供 10	" (1人当り)
		下士官 100	"
		私人 50	"
1821. 1. 15	付Oxley to Bigge (選択的不規則な土地区画の限界, 規則的方格プランの必要性)		
1821	人口38,778人 (Cumberland 27,931人)		
1822. 2. 18	付Brisbane 6 マイル四方のtownship 1 マイル四方のsectionの設定を指示	1822 Evans, district を設定	
1822—23	Bigge Reports		〈Moreton Bay〉
1825. 6. 30	(1. 1付) Bathurst方格プランの設定を指示	1825 VDL分離	1824 囚人集落として 出発
	40マイル四方 county	1825 人口14,192人	
	100平方マイル hundred		
	25平方マイル parish		
	640エーカーの区画 section		
1827—29	Mitchell地形測量実施→19郡公示	1825—29 郡, ハンド レッド, パリッ シュ設定	
1829	The Limits of Location Darling, Town planning Regulation		
1831	Land Regulation (土地競売, 1 エーカー当り 5 シリン グ以上) Mitchell方格プランに反対	1834 Frankland 地形と植生を理 由に sectionを 設定しない理由 を説明	
1832	執行委員会 方格プランの維持を決定		1839 自由移民入植開 始
1851	人口182,424人	1840 人口45,999人	
1855	測量庁調査委員会報告 (方格プランを断念)	1850 人口68,870人	
			1859 QLD分離
			1860 人口28,056人
〈1860—61年度作物栽培面積〉		100,000ha	62,000ha
〈1891年人口〉		1,127,100人	146,700人
			393,700人

画・開拓関係略年表

(1988. 金田章裕作成)

VIC	SA	WA
〈Port Phillip〉 1835 Batman入植 1836 Mitchell “Australia Felix” 1837 Melbourne建設 1839 Gipps報告 (640エーカー単位) 1840 人口10,291人 1840 Russel (土地均一価格, 土地関係業務の分離 (メルボルンに 事務所設置)) (郡, パリッシュ展開) 1850 人口76,162人 1851 VIC分離 1851 Ligar (経緯線による 方格プランの採用)	1829 “A letter from Sydney” 1831 Wakefield, (Gouger) 新植 民地入植案 (土地販売 (最低価格の設定), 男女同数の自由移民, 高密度 入植, 80エーカーの区画) 1834 SA植民地設立法 地券発行 (35,000ポンドの予 定歳入), (81ポンドで1エー カー+80エーカー, →1エー カー+134エーカー) 1836 Light, Adelaideと134エー カー区画 (残りは80, 54, 26) の設定 1838—GawlerとFrome80エーカー の区画の設定を推進 1841 人口15,485人 1842 他のオーストラリア植民地と 同一法下 “未入植地から3マイル以内の ところの土地所有者”に未入植 地への放牧権 (80エーカー当り 16頭の牛or馬, or100頭の羊) 1846 放牧権の枠としてハンドレッ ドの設定 (大型対小型家畜1:6) 1860 人口66,538国	1829 WA設定 (StirlingはDarling(NSW総 督)への勅令の写しを受けとる) * Stirling, Roe川沿いの長 大な区画の設定 1831 ロンドンでは入植者に郡・ハ ンドレッド・パリッシュへの 区画進行中と公告 1835 長大な区画の不都合に関する 請願→Roe, 地図の未整備, 人員不足等を指摘 1837 人口, 1,847人+185人 (軍人) 1839 英政府, セクションの設定を 断念 “土地は正方形に近く, 長さが 幅の3倍を越えない形の区画”, “境界線は同一地区における他 の国王下付地と同一方向” 1840 人口2,311人 1852 Roe業務目標として“28郡の 境界線と, その内部の区画の 設定” 1860 人口15,346人
157,000ha	145,000ha	10,000ha
1,140,100人	315,500人	49,800人

一方、西オーストラリアでは、郡・ハンドレッド・パリッシュ・セクションのいずれもが全く設定されなかった。土地区画は川沿いに、河岸に短辺を向けた長大なものがまず設定され、後に長さはそれ程ではなくなるものの、基本的なパターンは19世紀後半まで続いた。初代（後に再任）スターリング総督と測量長官ロウの志向性が、このような形態を選んだものと考えられるし、人口が極めてゆるやかにしか増加しなかったという背景も見出すことができない。都市プランについても、パース型ないしはロウ型とでも表現すべき形態が多く、ダーリング総督の規定とはかなり異なっていた。

もう一つの植民地南オーストラリアの場合、組織的植民政策を基本として別の法律を背景としていたために、特に初期においては、他と全く別のプロセスをたどった。アデレード周辺には測量長官ライトによって134・80・54・26エーカーという変則的な単位と形状の方格プランがまず出現し、その後ゴーラー総督および測量長官フロームによって80エーカーを基本とする方格プランが設定された。これは1842年に他のオーストラリア植民地と同一の法律下におかれた後も続き、ニュー・サウス・ウェルズやビクトリアに比べて小規模な方格が展開した。また、次第にその単位が大きくなったことも特徴の一つであった。郡とハンドレッドが設定されたが、パリッシュが全く設定されなかったことも大きく異なる点であり、特にハンドレッドが規則性を強めたことが特筆されよう。都市計画については、ライトが設計したアデレードが極立っており、その強い影響の下に、ユニークなパークランド・タウンが展開した。

このように、オーストラリア各植民地の初期の土地計画は、方格プランを軸として展開したとみてよい。なお、方格プランが採用される最大の理由は、測量が容易でかつ安価であることに求められよう。いかなる測量法および土地区画がいかなる人員や経費によって実施できるか、という議論がしばしば行われているのが、その根拠である。また、オーストラリアの方格プランは、北米のそれに比べれば不完全であることも、一応注意しておく必要がある。

いずれにしろ方格プランは、本国政府ないし植民地の政策立案にかかわる人々によって、土地区分のオーダーとしてあるいは土地下付もしくは販売の執行のために構想されるか、植民地の最高責任者である総督（時に測量長官）の秩序を求める志向性によって採用されたことが判明する。一定以上の入植の進行と人口増加のため、実務上の便宜がその採用を求めた場合もあり、この場合は測量長官等が前面に出ることになる。

しかし、方格プランの規定があっても、その実施の状況はさまざまであり、地形条件に代表される自然条件と、総督や測量長官の個性がその実施を進めたり、阻止したりしたことも知られる。これらをもってただちに一般化することはできないが、オーストラリアが極めて興味深いコントラストを示したことは事実であり、それぞれが貴重な事例となろう。

Land Planning and Colonization in the Australian Colonies

Akihiro Kinda

(Assistant Professor, Kyoto University)

The Governors of New South Wales were instructed to “lay out townships of a convenient size and extent” until 1825. Governor Brisbane directed Surveyor General Oxley to lay out one mile square “sections” and six miles square “townships” in 1822 to meet the urgent demand of increased settlers.

A new colonial policy came to N. S. W. from London in 1825 after the examination of Commissioner Biggés Reports, to divide the whole territory into about 40 miles square “counties”, about 100 square miles “hundreds” and about 25 square miles “parishes”, and to set one mile square “sections”. Oxley had to change “townships” to “parishes” in regions such as the Hunter River Valley.

The survey hierarchy of “county”, “hundred”, “parish” and one mile square “section” should have been carried out in all of the Australian colonies from 1825 to the 1850’s, excepting South Australia during 1836 – 1842. But the process and result of land surveys in each colony were quite different from each other due to physical and social conditions, the characters of the Governor and Surveyor General, or some combination.

N. S. W.; Sections, parishes, some hundreds, counties were laid out at any rate, but the rectangular land survey system itself was not successful and decided to abandon it in 1855. The main reasons why it broke down were negative attitude of Surveyor General Mitchell and Oxley’s rectangular land survey which was not accurate.

Tasmania; Counties, hundreds and parishes were planned by 1829, but rectangular sections were not laid out because of physical features and thick forest as reported by Surveyor General Frankland in 1834.

Western Australia; Long allotments were laid out, but one mile square sections, parishes and hundreds were not. Counties were planned but not implemented. Sur-

veyor General Roe continued to explain the necessity of such land surveys to the colonial secretary to 1852.

S. A.; Hundreds and counties were laid out nearly completely but parishes were not. Sizes of the rectangular allotments were quite different because of the systematic colonization for the foundation of the colony.

Victoria; The survey hierarchy based on one mile square sections was most completely carried out except hundreds, under the Governors Bourke and Gipps of N. S. W. and Surveyor Hoddle. This situation was not significantly different in the colony of Victoria.

A town or village reserve was also directed to be laid out in each township or parish. Governor Darling published regulations for the laying out and maintenance of town plans with grid street patterns in 1829. But it was not successful again in N. S. W., but very typically laid out in Vic. by Hoddle. The town planning in W. A. showed another characteristic patterns during the long administration of the survey department by Roe. Parkland towns in S. A. are quite different from others by the big influence of Surveyor General Light's town planning of Adelaide.